

対シリア政策，戦略的忍耐喪失の代償

Halper and Associates

(2014年11月24日)

3年間も戦略的迷走を続けたあげくに戦略を変更して3ヵ月、バラク・オバマ大統領は対シリア戦略をまた見直すことになるかもしれない。水曜日の夜にCNNが報じたところでは、オバマ大統領は現行の戦略を評価するためにチームを召集している。このチームは、反シリア勢力に対する米国支援の加速と拡大に加えて、アサド政府軍を標的にすることも検討する可能性がある。

一貫した戦略の見直しというのは優れた政策であり、対イラク／シリア戦略を綿密に検討することはオバマ政権にとって当然である。ただし、3年前に米国がシリア内戦に介入したのは大きな間違いであった。これは8月の時点でも誤りであり、現在でもそれは変わらない。米国がシリアに抱く重大な関心事はただ1つである。すなわち、イスラム国が米国や同盟国に対してテロ攻撃を仕掛けることを防ぐことである。シリア内戦を終結させても米国の国益にはならない。そして終結させるという国としての政治的意志もない。これらの要素が欠けているのであれば、米国は介入すべきではない。

バッシュアル・アル・アサド政権を打倒するために、米国が反政府勢力を構築する（もしくは政府軍に対抗する支援を米国自身が提供する）という取り組みは、いかなる手段であれ中途半端なものになるであろう。介入支持者達は、

彼らの計画が政治的には実行不可能であり、戦略的にも平凡なものであることは分かっている。一部にはアサド政権と戦うために自由シリア軍の戦闘員数千人を訓練することを提案している者もいる（彼らの利益にかなえば、イスラム国とも戦ってくれることを願う）。一方で更に大規模な計画を提案した者もいる。すなわち穏健派シリア人6万人の強力な反政府軍を組織し、欧米連合が自分達に都合のよい指導者を選ぶというものである。提案された戦略はすべて、米国が実際にその戦略を達成することができるという危険な前提に基づいたものである。この問題において、米国は必要不可欠な国かもしれないが、全能というわけではない。

介入主義者達は、「米国の介入によって戦争の終結が早まる」という前提を真っ先に挙げる。けれども介入が内戦を終結させることはなく、長引かせるだけである。内戦が終結するのは、介入国が戦争の勝利に最大限努力したときだけであろう。ただし私の言葉を鵜呑みにしないで欲しい。ジョージ・ワシントン大学のマーク・リンチ教授の著書や彼がこの議題に引用する圧倒的な量の学術研究を読んでもらいたい。或いは、皆さんが機密情報取扱許可を持っているなら（私は持っていないが、ニューヨーク・タイムズは持っている人を知っている）、反政府勢力への米国の支援に関するCIAの内部報告書を読んでみて欲しい。介入は効果がなく間違った

考えだというのがCIAの結論である。伝えられるところによれば、オバマ大統領はこの結論に納得したとのことである。そして今に至るまで納得しているようだ。

介入の正当化は困難

大規模介入の正当性を主張する少数派アナリスト達は、自分達の主張を証明するのに苦労しているようだ。外交問題評議会の評議員であり、ゲリラ戦の歴史に関する本の著者でもあるマックス・ブートですら、米国が反政府勢力を支援して介入したときの成功事例を2つしか思い浮かべなかった。米国による反政府勢力の支援が「効果をあげた」最たる例として、彼は1980年代の米国によるアフガニスタンへの介入とニカラグアのコントラへの支援を挙げた。ブルッキングス研究所の上級研究員であり、レーガン政権時代には政府関係者でもあったロバート・ケーガンは、コントラ事件の有名な修正主義的歴史の著者でもあるが、同様の記事の中でこれに同調する意見を述べている。ケーガンは介入に関する議論の中で「戦争は驚きに満ちている」と述べている。これは詰まるところ、何が起きるか分からないということである。ケーガンは1980年代のアフガニスタンとニカラグアに対する米国の政策を指摘して、「オバマ大統領が本当に選択肢を比較検討したいのなら、過去の“失敗”をもう一度見直すべきである」と結論づけた。「シリアにおける“失敗”は、今ではかなり良い結果のように思える」。

20年間にわたるタリバンの支配とアルカイダの安全な隠れ家（もしくはニカラグアに見られるような膠着状態にある消耗戦）が、ケーガンとブートの言うシリア戦略の効果だとすれば、失敗した場合は何が起きるのだろうか。CIAの組織内歴史家が「間違いだった」と決めつけたのも無理はない。

そしてシリアへの介入は失敗する可能性が高

い。米国の関与強化を支持する者達は、シリアがあたかも孤独と疎外感にさいなまれているかのように米国の役割を論じている。しかし米国の介入が及び腰であれば、ほぼ確実にアサド政権への支援を増大させることになる。ロシアは、国際的な非難にもかかわらずひそかに武器を提供して、長年にわたりアサドを支援している。モスクワはタルトゥース港へのアクセスを維持する決意を固めている。そして米国が自由シリア軍の戦闘員数千人を（早ければ2012年10月から米国が行っている内密の訓練ではなく）公然と訓練したとしても、ロシアが思いとどまることはないであろう。ましてやイランには更に投資している。テヘランはアサドを地域におけるイラン勢力圏の要と見ている。そしてイランは膨大な金額、兵器、ヒズボラに対する影響力、イラン人の命を戦争に注ぎ込んできた。テヘランはオールインで（全額を賭けて）勝負に出ている。そしてワシントンがリスクを回避するために賭け金を分散していることを知っている。なぜアメリカの政治家には同じことができないのだろうか。オバマ大統領は、この戦争では信頼できるパートナーが少なく、手札が悪いことを知っている。

アサド政権による残虐行為はアメリカ人の良心に重くのしかかる。けれども勝つ意志のない戦争に介入して更に多くの血を流すことは、より道徳的な選択肢とは言えない。

イラクにおける対暴動戦略の立案者のジョン・ネーグル退役陸軍大佐は最近、「戦争の目的は、より良い平和を構築することである」という聖アウグスティヌスの格言に言及している。一握りの頼りにならない反政府勢力と信憑性の低い亡命政権は別として、シリアにより良い未来を構築するためのパートナーが米国には少ない。米国とその薄弱な連合が穏健派の基準を忠実に守る反政府勢力を作り上げることができ、シリアの民衆に広く影響を及ぼすことができる

と示唆するのは、危険なまでに楽観的である。悪く言えば、思い上がりである。

これまでのところオバマ大統領の戦略は、シリアにおける米国の利益を基準にしており、時間があれば成功するかもしれない。オバマ大統領の最大の課題は深入りしないことである。マーティン・デンプシー将軍は木曜日の下院軍事委員会で「進歩には時折むらもある。それで

も戦略的忍耐を維持すれば、長期的趨勢は連合側に有利である」と述べた。オバマ大統領は戦略的忍耐に固執すべきである。なぜならもし米国が軍事介入してシリア紛争に引きずり込まれるようなことがあれば、戦いたくもなく勝てないかもしれない戦争をする危険があるからである。